

Title	イギリスのインド洋戦略と日米戦争：一九四一～一九四二年
Sub Title	British Indian ocean strategy and the Japanese-American war, 1941-1942
Author	赤木, 完爾(Akagi, Kanji)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2016
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.89, No.2 (2016. 2) ,p.41- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関根政美教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20160228-0041">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20160228-0041</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# イギリスのインド洋戦略と日米戦争

——一九四一〜一九四二年——

赤 木 完 爾

はじめに

- 一 日本の戦争計画におけるイギリス
- 二 「戦争指導大綱」と第二段作戦をめぐる紛糾
- 三 イギリスとインド洋
- 四 日英戦争  
おわりに

はじめに

イギリスがようやく極東戦争への参加を具体的に検討できるようになったのは一九四三年なかば以降である。シンガポール陥落以来、イギリスには、ドイツとイタリアと戦争をしている限り、日本の主力艦隊からの有力な

分遣艦隊に対してすらインド洋の制海を維持するのに必要な海軍力を捻出できないという基本的制約が存在した。<sup>(1)</sup>  
 一九四三年九月にイタリアが降伏し、同じ頃ドイツ戦艦ティルピッツがイギリス潜水艇の攻撃により、ノルウェーの泊地で行動不能となったことによって、イギリス海軍は本国水域および地中海に大規模な海軍力を保持する必要から解放された。こうした状況の下で、一九四四年はじめイギリス三軍幕僚長委員会<sup>(2)</sup>は、極東戦略の計画に本格的に着手することが可能となったのである。<sup>(3)</sup>

本稿はこれに先立つ時期において、太平洋での日米戦争がイギリスのインド洋戦略にいかなる影響を与えていたかを検討することである。それは日本の戦争遂行とインド洋に対するイギリスの懸念を、より大きな大戦の戦略的文脈から理解することを試みるものでもある。ことに重視する時期は、日本の参戦から、ミッドウェー海戦を経て、アメリカ軍のガダルカナル反攻開始までの期間、すなわち一九四一年一月から一九四二年八月頃までである。

#### 一 日本の戦争計画におけるイギリス

最初に検討するのは、インド洋をめぐるイギリスの懸念に照応する日本の戦争計画と戦局の推移についてである。<sup>(4)</sup>

第二次世界大戦における日本の戦争計画が策定される過程においては、二つの仮説が存在した。それは「ドイツの不敗」と「イギリスの屈服」である。この仮説は日本軍部の政策決定者に一九四〇年五月のドイツの西方電撃戦以来一貫して共有されていた。一九四一年九月から十二月にかけて日本の戦争決意が形成された。ことに一月五日の御前会議で、対英米蘭戦争は不可避と判断された。開戦にあたっての基本戦略が、大本営政府連絡会

議が一月一五日に決定した「対英米蘭蔣戦争終末促進に関する腹案」である。この腹案の決定をめぐって、すでに陸軍と海軍の間で対立があった。開戦前の研究において、政府と統帥部は戦争が長期戦になる公算が大であり、この長期戦を戦い抜く戦略物資が日本には不十分であり、したがって日本にはアメリカを武力で屈服させる手段がないことを認識していた。たとえば九月六日の御前会議において、永野軍令部総長は、日本は進攻作戦を以て敵を屈服させ、その戦争意思を放棄させる手段はないと発言していた。<sup>(5)</sup> こうした認識は陸軍も共有していた。しかしながら想定されていた戦争の様子は、陸軍は「長期持久戦」であり、海軍は「短期決戦」であり、そこに認識の一致はなかった。「長期持久戦」と「短期決戦」の含意はそれぞれ「不敗」と「引き分け」である。

敵を直接的に屈服させることのできない日本の戦争計画が構想したのは、先に触れた二つの仮説に基づいた間接的な戦争終結シナリオであった。その中で強調されていたのが、まずイギリスを屈服させ、その影響を利用して戦争を少なくとも引き分けに持ち込むという構想であった。

開戦にあたっての総合的な戦争計画は、一九四一年八月頃から陸・海軍および外務省の事務レベルで「対英米蘭戦争指導要綱」として立案準備されていた。このうち最終部分にあった戦争終末促進の方略が抜き出されて、「腹案」となった。<sup>(6)</sup> 一月一五日に大本営政府連絡会議で決定された「腹案」は日本の基本戦略であり、そことは政府・統帥部において一般に諒解されていた。戦争前に成文として出来上がった唯一の戦争計画であったといえる。<sup>(7)</sup>

前述のように、日本がアメリカを自ら屈服させる手段を持ち得ないことは自明であったとしても、そのことはそのまま日本が必ず敗北するという見通しが確認されたということではない。一九四一年九月から一二月にかけて何度も開催された連絡会議の審議や討議の記録、関係する政策文書を取りまとめて論ずれば、以下のようになる。すなわち初期作戦の勝利は確実であり、一定の条件さえ満たされれば引き分けに持ち込める。しかし最終

的な見通しは不明ということになる。だが長期戦の場合の見通しについては、陸海軍の首脳は概して悲観的であった。<sup>(8)</sup>

「対英米蘭蔣戦争終末促進に関する腹案」の基本構想は次のように規定されている。<sup>(9)</sup>

方針

速やかに極東に於ける米英蘭の根拠を覆滅して自存自衛を確立すると共に更に積極的措置に依り蔣政権の屈服を促進し独伊と提携して先ず英の屈服を図り米の継戦意思を喪失せしむるに勉む

要領

帝国は迅速なる武力戦を遂行し東亜及び西南太平洋に於ける米英蘭の根拠を覆滅し戦略上優位の態勢を確立すると共に重要資源地域並主要交通線を確保して長期自給自足の態勢を整ふ  
凡有手段を尽して適時米海軍主力を誘致し之を撃滅するに勉む

長期持久を目的とした戦略の方向と、短期の決戦によって引き分けをめざす戦略の方向が併記されていることに注目すべきであろう。ここには第一段作戦終了後に直ちに戦略の紛糾が生じる種子が胚胎していた。アメリカの屈服が不可能であれば、迂回的な方法で継戦意思を喪失させ、引き分けをめざすしかない。そこでイギリス打倒の迂回策が最も効果的だと判断された。

ともあれ大本営は、比較的脆弱な西正面、イギリスと重慶に攻撃の重点を指向した。そしてイギリスを屈服させることがアメリカの継戦意思喪失に繋がるという戦争終結のシナリオを重視した。さらに日独伊提携してイギリスの屈服を図る方法として、次の三つを掲げている。それは第一に、豪州・印度に対して戦略及び通商破壊等の手段により、イギリス本国との連鎖を遮断してその離反を策す。第二に、ビルマの独立を促進し、その成果

を利用して印度の独立を刺激する。第三に独伊は日本に呼応して、近東・北アフリカ・スエズに進出して西アジア打通作戦を展開する。またイギリスに対する封鎖を強化し、情勢が許すならばイギリス本土上陸作戦を実施する<sup>(10)</sup>。これらのうち日本が主体的に関われるのは第一と第二の方法くらいであり、直接の効果が期待できるのはもっぱらドイツに依存している形である。「腹案」ではこのほか米豪間の隔離を謳っているが、これは日本が関われるとしても、イギリスの屈服とは結びつかない方針であった。

それでは直接日本が関われないけれども、イギリス屈服のためにヨーロッパにおけるドイツ・イタリアの対英戦争に対して日本が協力できる方法は何であったか。それは第一にドイツのコーカサス、中東、北アフリカ方面への進出に呼応して、西アジア、インド方面に共同作戦を実施し、インド洋での日独伊三国間の軍事提携を図り、アジアにおけるイギリス帝国の勢力圏を脅かす。第二にドイツの対ソ戦争の負担を軽減し、その戦争努力をイギリスに集中させるために日本の仲介によって独ソ間の和平を実現すること。第三に同じ目的のために、ドイツの要請に応えて、日本が極東ソ連を攻撃することであった。これらの協力方法の中で、日本の対ソ参戦はドイツ側が一貫して日本に要求していた。しかし日ソ中立関係の維持は南方作戦の成功のためには必須の条件であり、日本はついに応じなかった。また第二の独ソ和平斡旋は、戦争期間中、陸海軍と外務省が追求した戦略であったが、ドイツ側は一貫して日本に対ソ攻撃を求め、ソ連も対独和平に応じることはなかった。最大の問題は、日本は独ソ戦の特異な性格について、ついに理解することがなかったことにある<sup>(11)</sup>。

現実の国際情勢とヨーロッパ戦局の推移は、日本の希望的観測に沿って動いてはいなかった。ドイツは一九四〇年秋にイギリス本土上陸を断念、一九四一年六月に一転して対ソ戦争に突入した。その対ソ戦争も最初のうちは順調に進んだが、冬の到来とともに頓挫した。けれども陸軍はドイツの勝利に期待を寄せ続けた。一九四二年春には対ソ攻勢をドイツが再開し、ソ連ついでイギリスを打倒するかもしれないと期待したのである。

さて一九四一年一月五日に裁可された「南方作戦陸海軍中央協定」はフィリピンおよび英領マラヤに対して同時に急襲作戦を実施し、左右二方向から南下して蘭印に至るといふ作戦が採用された。南方作戦の目的は、すでに見たように東アジアにおける米英蘭の根拠地の覆滅と占領であり、主要占領地域はフィリピン、グアム、香港、英領マラヤ、ビルマ、蘭領東印度（ジャワ、スマトラ、ボルネオ、セレベス）であった。しかしながら中央協定もその後の作戦展開には触れていない。<sup>12)</sup>

開戦時の真珠湾攻撃は、作戦の投機的な性格のために軍令部は反対したが、山本五十六聯合艦隊司令長官の強い決意で実現した。また南方作戦の左翼側を守るといふ作戦の意義から陸軍も納得した。結果としてアメリカ太平洋艦隊の主力を撃滅することに成功したのである。<sup>13)</sup>

## 二 「戦争指導大綱」と第二段作戦をめぐる紛糾

一九四一年二月八日、日本政府は英米蘭に対して宣戦した。開戦後百日間の日本軍の進撃は瞠目すべきものであった。第一段作戦は順調に進捗した。香港は二月二五日に占領され、一九四二年一月三日にはマニラを占領、シンガポールは二月一五日に陥落し、ラングーン占領は三月八日、翌日九日にはジャワを占領し、蘭領インド政府はオーストラリアに脱出した。一九四二年三月までに南方の資源地帯は日本が占領することになった。

「腹案」は戦争終結の機会としては次の三つのタイミングを示していた。その第一は南方作戦の主要段落。第二は中国に対する作戦の主要段落、とくに蒋介石政権の屈服。第三にヨーロッパにおける情勢変化の好機、独ソ戦の終末、対インド施策の成功を挙げている。<sup>14)</sup> この計画からすれば、「腹案」に想定された第一の戦争終結の機会が訪れたことになる。第一段作戦後の戦争計画が、大戦略である「腹案」のシナリオに沿って作成されたので

あろうか。別言すれば、イギリス要因を重視する西向きの戦略方針が貫徹されたかどうかが次の問題となる。

次期の作戦計画が検討されつつある中、大本営政府連絡会議は一九四二年三月七日に「今後採るべき戦争指導の大綱」を決定した。「腹案」はもともとドイツの動向に決定的に左右される性格を有していたが、ドイツが日本の希望に沿って動く気配すらなく、一貫して対ソ参戦のみを求めていたことは、「腹案」の戦争終末構想を破綻へと導いた。緒戦の戦勝気分の中で作成された「腹案」を引き継ぐこの大綱ではイギリス屈服の見通しが不透明となった状況の下で作成されたが、開戦前の「腹案」と同じように、長期持久戦略と短期決戦戦略が調整されず、玉虫色の決定となった。すなわち「英を屈服し米の戦意を喪失せしむるため、引き続き既得の戦果を拡充して長期不敗の政戦態勢を整えつつ、機を見て積極的の方策を講ず」と矛盾する方針が併記された。「戦果の拡充」と「長期不敗の態勢確立」と「積極的方策」の優先順位は調整されなかったのである。<sup>(15)</sup>「具体案よりも、とに角作文の辻褄を合わすことが先決だった」とする回想もある。<sup>(16)</sup>

結果として西向きの戦略方針が貫徹されることはなかった。その理由は、第一に緒戦の大勝利に影響されて、陸海軍ともに勇ましい議論百出となり、第一段作戦以降の進出方向について多くの議論が戦われるなかで、「腹案」に沿った厳格な指導がされなかったことに求められる。第二に、日本の西アジア方面への攻勢のアイデアは一九四二年春のドイツ・アフリカ軍団のスエズ・エジプト方面への攻勢の進捗によって、「黄金の機会」に恵まれたかに見えたが、ソ連と死闘を繰り返しているドイツは、日本の対ソ参戦を要求することに終始し、日本はあくまで対ソ関係の現状維持を望んだからである。

第一段作戦以降の作戦を検討した海軍は、一九四二年四月一五日、第二段作戦を決定した。この作戦計画は、山本聯合艦隊司令長官の強い意向によって、積極的な攻勢作戦の考え方が顕著であった。他方陸軍にあつては様々な論議や発想はあつたものの、ジャワの占領によって、日本の南方作戦の戦略目的は達成され、基本的には



これ以降、長期持久態勢の確立を目的とすべきであると主張していた。

海軍の作戦計画は以下のようなものであった。第一にインド洋にあるイギリス艦隊を撃滅し、またドイツ・イタリアの西アジア作戦に呼応して、セイロンを攻略し、イギリス・インド間の連絡を遮断して、ドイツ・イタリアとの連携を確保する。第二に、フィジー諸島・サモア諸島・ニューカレドニア島を攻略して、アメリカ・オーストラリア間の海上交通路、航空路を遮断し（FS作戦と呼称）、できれば将来オーストラリア攻略を企図する。第三に、敵の日本本土奇襲を困難にするためミッドウエー島を攻略し、アリューシャン列島の作戦基地を破壊または攻略して、アメリカの作戦企図を封止する。第四に、ハワイの外郭要地（ジョンストン島、パールミラ島など）を攻略し、アメリカ艦隊に決戦を強要する。状況が許せば、陸軍と協力してハワイを攻略することがある。<sup>(17)</sup>

海軍の作戦検討にあたっては、東京の軍令部と、緒戦の大勝利に勢いづいた聯合艦隊司令部の間では、充分な意思疎通がなく<sup>(18)</sup>、また聯合艦隊司令部も山本長官と司令部幕僚との間で、必ずしも思想が統一されているとは言えなかった。軍令部はアメリカとオーストラリアの連絡線の遮断をめざす、フィジー・サモア作戦を主張し、聯合艦隊司令部は、大戦略は西方にあると考える宇垣纏参謀長以下の参謀がセイロン島攻略・インド洋作戦を検討する一方、他方では太平洋におけるアメリカ艦隊の撃滅を追求する計画を練った。<sup>(19)</sup> 軍令部は対米正面に関心が強く、セイロン攻略には反対ではないものの、強い支持もしていなかった。<sup>(20)</sup>

山本長官は、一九四二年四月末に次のように発言している。「長期持久、守勢をとることは聯合艦隊長官としてはできぬ。海軍は必ず一方に攻勢をとり敵に手痛い打撃を与える必要がある。敵の軍備力は私の五ないし十倍である。これに対しては次々に敵の痛いところに向かって猛烈な攻撃を加えねばならない。」「既成の一勝に安んじて、我が不敗態勢成るなど考ふるは痴愚に等し」。<sup>(21)</sup>

陸軍は、「腹案」の大戦略を無視するかのような海軍の積極主義、ことに東向きの対米作戦には当惑した。田

中新一参謀本部作戦部長は、このころ業務メモにしばしば、「戦争指導は恐るべき転換を来すかも知れない」とか、あるいは「海軍の太平洋攻勢作戦が戦争指導の主権者になる」との懸念を記している。<sup>(22)</sup>

それでは陸軍の方針はいかなるものであったか。田中作戦部長は、一九四一年二月終わりに、次期作戦の目標を、(一) 日ソ戦(シベリア攻勢)、(二) 日支戦(重慶作戦)、(三) インド攻略戦、(四) インド洋日英戦(セイロン攻略など)、(五) 西亜(西アジア)作戦とメモしていた。西アジアとはペルシャ、イラク、アラビアあたりをさすので、北アフリカのドイツ軍のエジプト進攻に呼応するものであったと推定できる。<sup>(23)</sup> この目標のうち(三)(四)(五)はいずれもイギリス打倒を優先する「腹案」に忠実な目標であった。しかし田中作戦部長がもっとも重視していたのは、一九四二年の春以降の満洲における対ソ開戦であったといわれる。<sup>(24)</sup>

陸軍は結局、満洲における対ソ戦の敢行を視野に入れて、一九四二年一月から開始したビルマ攻略作戦を進める中で、インド洋進出は時期尚早として同意しなかった。さらにドイツの中東進出は早期にはあり得ないと判断していたことも影響している。ともあれ陸軍は南方資源地帯の占領の後、長期持久戦の態勢に入るといふ基本的方針は、第一段作戦の想像以上の成功による揺らぎはあったものの、一貫していた。

こうした事情から実際のインド洋作戦は限定的なものとなり、日本海軍は一九四二年四月に強力な二つの任務部隊をベンガル湾に投入し、セイロン島の攻撃を行ったが、その攻略は行わなかった。この後、インド洋の作戦は、一〇隻に満たない潜水艦がドイツ潜水艦とともに、海上交通破壊戦に従事するのみであった。<sup>(25)</sup>

海軍の第二段作戦における衝撃的な失敗は、ミッドウエー海戦における敗北である。アメリカ空母を全滅させようとした作戦で、逆に日本の空母群が壊滅的な損害を被った。山本は、ハワイの攻略によって戦争終結の機会をつかむことを期待していたと思われるが、そのためには海軍は米・英艦隊に連戦連勝しなければならぬ。山本の連続決戦構想は、早くもミッドウエーで挫折した。もちろん南方の資源地帯を防衛して、ドイツの勝利を待

つという陸軍の戦争計画の考え方も、勝算は乏しいものであった。しかし山本の構想もまた非現実的なものであった。<sup>(26)</sup>

ミッドウェー作戦が失敗した後、海軍はドイツ・イタリア軍の北アフリカ作戦の進捗に呼応して、再編した聯合艦隊を投入するインド洋作戦を決定した。ここにはアメリカの反攻が一九四三年以降であるとの判断が影響している。田中作戦部長も、六月二日トブルク陥落を受けて二六日、セイロン島の攻略を東條首相に進言している。<sup>(27)</sup>七月一日、永野軍令部総長は海軍の作戦の変更について上奏した。<sup>(28)</sup>それはドイツの北アフリカ攻勢と大西洋での交通破壊戦の戦果を期待し、作戦の重点をインド洋に移そうとしたものである。そして中東地域をドイツ・イタリアとともに挟み撃ちにし、あわせて輸送船舶の打撃によってイギリスを崩壊に追い込むという構想であった。ドイツの戦果頼みの構図に変化はないが、ここで作戦方針は再び「腹案」以来の西方重視に立ち返ったのである。海軍の作戦計画は、セイロン島からチャゴス島、マダガスカル島付近に至るインド洋海域を潜水艦と主力艦隊によって制圧するという大規模なものであった。<sup>(29)</sup>

またこの上奏において、永野軍令部総長は、ミッドウェー作戦後に実施する予定であった、F S 作戦の中止を報告している。しかしながら、「大綱」において併記された戦果の拡充の勢いもあり、海軍は米豪遮断を前提とした準備を進めていた。内南洋の艦隊根拠地トラック諸島を防衛するためにニューブリテン島のラバウルに基地航空部隊の主力を集中、さらにソロモン諸島のガダルカナルに航空基地を建設しつつあった。軍令部はF S 作戦の中止を決定し、インド洋作戦に大きく発想を転換したが、F S 作戦に関連した支作戦は続行させていた。この不意なガダルカナル進出が、重大な蹉跌を生み出すことになる。

聯合艦隊はインド洋作戦に備えて、艦隊をシンガポールに集結しつつあったが、八月七日、アメリカ第一海兵師団がガダルカナル島に上陸した。これに対し、海軍は即座に激烈に反応し、聯合艦隊の全力をあげてこのアメ

リカの攻勢に対抗することになり、東ソロモン諸島海域において、激烈な消耗戦を繰り返すことになる。<sup>(30)</sup> ソロモン方面の戦争の激化は、インド洋作戦にとどまらず、対ソ、対重慶など西向きの攻勢作戦を一九四二年末までにすべて取りやめざるを得ない事態を生み出すこととなった。

### 三 イギリスとインド洋

イギリス帝国にとってのインド洋防衛の重要性は、イギリス海軍省作戦部長を務めたこともあるジョージ・バラード提督 (Admiral George A. Ballard) によれば次のように理解されていた。「帝国の現在の構造あるいは組織についていえば、帝国はイギリス諸島を含む西洋部分と東洋部分に大きく分けられる。それらは、商業上も戦略上もインド洋を通る帝国の連絡線 (the Imperial lines of communication) によって保持されており、帝国全体は同じインド洋の貿易路によって東方に広がる異国の地と結びつけられている。もしこの連絡線が遮断されれば、……確実に帝国の東西は、ばらばらになってしまう<sup>(31)</sup>」これを要するにインド洋はイギリス帝国の一体性を維持するための扇の要のような存在であると認識されていたわけだが、そうであるがゆえに、第二次世界大戦においてインド洋を中心とする枢軸国の戦争協力は常に懸念の対象となった。

第二次世界大戦の初期において、イタリア海軍やドイツ海軍が直ちにインド洋におけるイギリスに対する脅威を構成することはなかった。しかし、紅海に面するエリトリアのマッサワ港、インド洋に面するソマリアのモガデシユ港はいずれもイタリアの領有するところであったが、後者は一九四一年二月二十五日にケニアからのイギリス軍部隊によって、前者は四月八日にスーダンからの部隊によって占領された。さらに英領ソマリランドのペラベラは一九四〇年八月以来イタリアによって占領されていたが、一九四一年三月一六日にアデンを発したイギリ

ス軍部隊が水陸両用作戦によって奪回した。<sup>(32)</sup> これらの戦役には、インド洋における海軍根拠地を枢軸国が使用する可能性をあらかじめ排除する意図があった。ともあれイギリスがエジプトを保持している限り、イタリア海軍がインド洋に進出する蓋然性は限りなく低かった。

日本とドイツが連合した戦争を遂行する可能性は、日本の真珠湾攻撃の後、ドイツが対米参戦をなした時点でもっとも高まった。しかしヒトラーの対米参戦は日本を支援するためのものではなく、本質的には米独関係の悪化が原因であり、<sup>(33)</sup> したがって日独間に高度な戦略レベルの協力関係を導くものではなかった。

ただし、こうした枢軸国が連合した戦争努力を実行する可能性があった唯一の戦域はインド洋であり、ドイツが中東に対して圧力を加えることによって、日本のインドおよびインド洋における攻撃行動を相互に支援することが可能であったかもしれない。それは、たとえば独ソ戦開戦以前におけるドイツのトルコへの進出・領内通過によって、独ソ戦開戦後にあつてはドイツのコーカサス進出によって、日独双方から圧力が加えられることをイギリスは恐れていた。

これらの懸念はイラクとヴィシー・フランスが影響力を有するシリアへのドイツの工作に対するイギリスの懸念を増幅させ、一九四一年夏のイラクとシリアに対するイギリスの進攻に繋がった。さらにドイツのトルコ進攻も実現しなかった。ドイツはそれを実行しなかったし、仮に実行した場合にはトルコの激烈な抵抗を招いたと思われる。トルコに領内通過を認めさせることはさらに難しかった。

結局のところ、一九四二年終わりのバクー近辺のアゼルバイジャンの油田に対するドイツ軍の攻撃計画は、ソ連の抵抗とヒトラーのスターリングラードへの執着によって潰えた。一九四二年八月末には、イギリスとソ連はイランの占領に着手しており九月一七日にテヘランは占領された。イランはソ連に対する武器貸与物資の重要な輸送路となり、さらにドイツがコーカサスや中東に進攻してきた場合の英領インド防衛のための十分な縦深を提

供することになった。

ドイツのインド洋に対する脅威は、直接的にはエジプト方面から来ていた。一九四一年ドイツはリビアのイギリス軍を排除した。一月には再び奪い返されたが、一九四二年はじめには再度攻勢をとっていた。同年六月二〇日エジプトの前哨防衛拠点であるトブルクが陥落し、ロンメル指揮下のドイツ・アフリカ軍団はエジプトに入った。しかし七月および九月におけるロンメルのアレキサンドリアとスエズ運河への前進をめざす攻撃はイギリスに阻止された。ドイツ軍の進撃は重大な圧力と危機感を生み出し、アレキサンドリアからイギリス地中海艦隊の退避を導くほどであった。しかしながらドイツの攻撃は不首尾に終わったのである。

こうした経緯から、インド洋に対する脅威は日本から来ることになった。インド洋は連合国の戦争努力に様々な側面に深く関わっていた。中東が産出する石油はまずインド洋を経由して運搬されており、またソ連と中国に対する援助物資はインド洋通って輸送された。こうした意味でインド洋はエジプト、中東防衛の中心であり、インド、オーストラリア、南アフリカ軍の展開というイギリス帝国の戦争努力の連結に不可欠であった。

#### 四 日英戦争

戦間期におけるイギリスの極東防衛構想は、日本の武力進出に対抗してシンガポールを確保することと、日英戦勃発の場合、有力な艦隊を極東に派遣するということであった。<sup>(34)</sup>

日本の攻撃に対するイギリス帝国の脆弱性は、戦前の軍事計画において大きな主題であり、実際にシンガポールに大規模な海軍根拠地を建設する計画が練られた。イギリス海軍省の一九一九年のある覚書は、イギリス海軍が極東において日本の艦隊に対してすでに劣っているのではないかと警告している。そして根拠地として香港は

脆弱であるので、代わりにシンガポールの基地を開発すべきであると主張していた。それは危険なく増援を行うために、シンガポールが十分に日本から遠距離にあることを指摘している。<sup>(36)</sup>

一九三〇年代までにはイギリスは対日戦争時に、シンガポールへ大規模な艦隊を派遣することを計画していた。<sup>(36)</sup>しかし、一九四〇年に至って海軍に関する状況は極端に悪化した。ドイツがフランスを打倒したためフランス艦隊が連合国から脱落し、イギリスの脆弱性が増大した。こうした事態はイタリアの参戦によってさらに悪化した。イタリアの参戦はイギリスの地中海における立場を脅かした。ドイツに征服されたノルウェーとフランスに潜水艦のための前進基地が建設されたことは、イギリスの大西洋における補給路を第一次世界大戦時以上に危険にさらすことになったのである。一九四一年にイギリス海軍は地中海と大西洋で大きな損害を被った。こうした情勢にあつて、海軍軍令部長が一九四一年九月、なぜ極東に増援できないのかを説明する際、巡洋艦の不足を訴え、「駆逐艦に関する状況も同様に芳しくない」と付け加えたことはけだし当然であつた。<sup>(37)</sup>

ドイツを懸念するあまり、イギリスは西太平洋におけるアメリカ艦隊がマラヤとシンガポールの防衛に役立つという希望を誤つて抱いており、同時に日本の航空戦力に直面したみずからの海軍部隊の運用について深刻な誤りを犯した。強力だが空母を伴わない艦隊を日本のマラヤ上陸に対応するために派遣したが、一月一日、日本海軍の基地航空部隊によって、戦艦プリンス・オブ・ウェールズと巡洋戦艦レパルスが撃沈された。この海戦は戦艦クラスの艦艇が海上において航空攻撃のみで撃沈された最初の例となり、この損失は航空掩護のない主力艦の航空攻撃に対する脆弱性を示した。<sup>(38)</sup>

同海域にあつた他のイギリス艦艇はその後新編された米英蘭濠部隊 (ABDA Command) に配属されたが、優勢な日本海軍に抗すべくもなく、一九四二年二月二七日―三月一日のジャワ海における海戦で英重巡エグゼター、濠軽巡バースが失われた。残余のイギリス艦隊はその後インド洋に後退、コロンボで新編されたサマヴィル英海

軍大將 (Admiral James Somerville) 指揮下の東方艦隊に配属された。<sup>(39)</sup>

その後二月一五日にシンガポールが陥落し、続いて三月八日ビルマのラングーンも陥落した。マラヤ、シンガポール、スマトラとビルマの征服によって、日本はインド洋地域への進出のための良好な拠点を獲得した。インド洋地域では、イギリス軍の撤退したアンダマン諸島とニコバル諸島は日本軍が三月に占領した。

サマヴィル大將が東方艦隊に着任したとき、指揮下にあった兵力は艦隊空母二隻、軽空母一隻、戦艦五隻、重巡二隻、軽巡五隻、駆逐艦一六隻、潜水艦七隻であった。しかし一見強力に見える艦隊も、空母艦載機は攻撃機五七、戦闘機三六を有するにすぎず、また戦艦はいずれも艦齢二〇年を超える老朽艦であった。<sup>(40)</sup>

この兵力に対し、日本海軍は一九四二年四月、強力な二つの任務部隊 (南方部隊機動部隊と馬來部隊機動部隊) をベンガル湾に投入し、このうち南雲部隊はセイロン島を攻撃、英重巡二隻を撃沈し、引き続き空母ハーメスを沈めた。他方小沢部隊はベンガル湾北部で四月五日から九日の間、二三隻一万二三二トンの商船を沈めていた。さらにインド西海岸での日本潜水艦の作戦により、四月一日から一〇日の間に五隻三万二四〇四トンの商船が撃沈された。この状況は、インド洋の制海権の喪失が現実になりつつあったことを示していた。<sup>(41)</sup>

四月七日イギリス海軍省は、かかる状況下では「R級戦艦は資産であるよりもむしろ負債である」として、サマヴィル大將に対し、戦艦をアフリカに後退させることを彼の判断に委ねた。翌日サマヴィルは低速部隊を東アフリカのキリンジニに引揚げ、付近の船団航路の警戒に従事させ、高速部隊はインド洋にとどめて敵快速艦艇に備えることに決した。<sup>(42)</sup>

こうしたインド洋の危機に直面したチャーチル首相はローズヴェルト大統領に対し、四月七日と一五日の二回にわたり、アメリカ太平洋艦隊が「インド洋にある日本海軍部隊を太平洋に引き戻すような性格」の攻撃行動をとることを懇請している。<sup>(43)</sup> その中でチャーチルはインド洋にある英艦艇は近代化された日本艦艇に対抗し得ない



と率直に告白している。さらにインド洋情勢を展望して、予想される結果としてセイロンの喪失、東部インドに対する日本の進攻を指摘した。そしてこれらが現実化した場合、カルカタとビルマを通じる中国との接触をすべて失うと予測し、連合軍がインド洋における海軍戦力を再建し得ぬ間に、日本がインド洋西部で優位に立った場合には、中東において連合国側が占めている地位は全面的に崩壊すると警告していた。そしてチャーチルは日本海軍を太平洋に引き戻す作戦が不可能であるなら、米艦隊の一部をインド洋に回航することを希望した。<sup>(44)</sup>

この後、太平洋における戦局は、四月八日のドーリットルによる東京空襲、五月の珊瑚海海戦、六月のミッドウェー海戦とめまぐるしく展開する。四月初旬、イギリス三軍幕僚長委員会は事態の深刻さに戦慄していた。帝国参謀総長のアラン・ブルック (Alan Brooke) 大将は、四月六日と翌日の日記に次のように記している。「幕僚長委員会に出席し、私は日本の艦隊の大半がインド洋に現れ、東方艦隊が西方へ後退しているということを知った。今に至るまで変化の兆しはない。私はインド洋で我々が弱体であるこの状況を好まない。我々がおかれている非常な困難を緩和するため、アメリカ軍に日本に対する対抗行動を行わせるよう、私は海軍軍令部長に言い続けているが、彼は今に至るまでそれに成功していない。」「我々は日本の艦隊のインド洋に対する侵入によって引き起こされた不愉快な状況について検討している。これこそが私が恐れ続けていたことであり、軍令部長が先週ほぼ忙殺された理由である。ウエーヴェル (Archibald Wavel (インド駐留軍司令官) からの航空支援を求める気も狂わんばかりの要請がきているが、ポータル (Charles Portal (空軍参謀総長) によれば、この要請にはほとんど応じられないという。帝国がこのような危険な状況におかれたことは歴史上一度もなかったのではないかと私は思う。」「幕僚長委員会の会合では、いつも主要な問題はインドを日本から救うことである。制海権と制空権の喪失という暗い見通しが立てられている。」<sup>(45)</sup>

おわりに

もし日本がインド洋において恒常的なプレゼンスを保っていたならば、イギリスのインドにおける地位のみならず、イギリスの石油輸送に対してペルシャ湾から圧力をかけ、オーストラリアとの連絡路を脅かすことでイギリスの中東における立場にも脅威を加えることになったと思われる。一九四二年三月までに、イギリスは二個師団相当の戦力でセイロン島の防備を拡充したが、この脅威に対する対応であった。

ポール・ケネディ教授は、一九四二年春に日本がセイロンを攻略し、そこから空母によるインド洋作戦を実行した場合には、決定的な効果が生まれたのではないかと推測している。すなわちその作戦はインドを孤立させるだけでなく、ペルシャ湾とエジプトへの交通線を阻止し、後者はアラメインへのイギリスの戦力増強を阻止することになったのではないかと論じている。そして戦争のこの段階では中東においてある種の日独の合流が行われることを想像することは、それほど荒唐無稽のことではなかったと論じている。<sup>46</sup>

日本のインド洋作戦はサマヴィル提督にペルシャ湾から航行してくるタンカーやペルシャ湾と紅海から東アフリカ沖を通過して喜望峰へと至る航路とアラビア海の防衛の必要を認識させた。これはボンベイとモンバサに東方艦隊を撤退させることで対処された。日本はセイロンを占領しておらず、作戦の策源地を遠距離にあるシンガポールに頼らざるをえないため、この措置は賢明なもののように思われたが、セイロン島とインド全体についてさえ防衛上の深刻な懸念が存在した。イギリス海軍は前進防衛の態勢をとることができず、さらにインド全土の防衛のために十分な航空兵力は存在しなかった。

これに対応するため、イギリスはヴィシー・フランス軍からマダガスカル島を奪取する計画を進めなければならなくなった。三月に通信傍受によりドイツが日本にマダガスカル島を占領しよう説得していることが判明し、

イギリスは日本の潜水艦がそこを基地として活動することを警戒した。イギリス軍は五月五日、主要港デイエゴ・スアレスを攻撃し、同地のフランス守備隊は五月七日に降伏した。マダガスカル全島のヴィシー・フランス軍は一月五日に降伏した。<sup>(47)</sup>

大観すれば、イギリスにとつてのインド洋の安全は、太平洋における日米海戦の激烈な展開によって確保された。一九四二年五月、日本海軍は艦艇の大半をポートモレスビー攻略に振り向け珊瑚海海戦が発生し、続いてミッドウェー海戦となる。ミッドウェー海戦後、再びインド洋へ日本の関心は向けられたが、東ソロモン諸島へのアメリカの反攻によつて、それは長続きしなかった。インド洋の脆弱性はきわめて高かったにもかかわらず、それに乗ずる作戦はついに採られなかったのである。日本は劣位にある敵に対する大きな優位をさらに拡大し、イギリスのマダガスカル島攻撃の機先を制し、イギリスの石油輸送を滞らせることを試みず、主力艦隊を太平洋戦域のもつとも強力な敵に振り向けたのである。

一九四二年五月以降、日本はその海軍力を完全に太平洋に集中したため、インド洋における襲撃は行われず、イギリス海軍は地中海と大西洋に資源を集中することが可能となった。マダガスカル島攻略時にイギリスは二隻の空母を投入したが、その後一九四三年一〇月までインド洋に空母は配備されず、一九四四年六月の連合軍の北フランス上陸作戦の後、イギリスは対日戦に海軍力のほぼすべてを投入できるようになった。

日本の戦争指導の第二段作戦をめぐる紛糾と、陸海軍間の、および海軍内部の戦略の混迷を顧みるとき、大戦略レベルから戦域の戦略に至るまで、異なる戦域間の相互の関係性に対する理解、企図される作戦の優先順位の調整において、英米連合は巧みに一九四二年の危機を凌いだといえるであろう。

(1) Charles Eade, ed., *Winston Churchill's Secret Session Speeches* (London: Cassell, 1946), 47.

- (2) 第二次世界大戦における英米の戦争指導組織とその訳語については赤木完爾『第二次世界大戦の政治と戦略』（慶應義塾大学出版会、一九九七年）五—八ページ参照。本稿も同一の方針で訳語を一貫させている。
- (3) 赤木完爾「イギリス海軍の太平洋戦域参加問題—連合戦争の一断面」『軍事史学』第一九卷第三号、一九八三年二月、同『第二次世界大戦の政治と戦略』に収録。同「イギリス太平洋艦隊始末 一九四四—一九四五年」『法学研究』第八三卷第一二号（二〇一〇年二月）五七—八二ページ。
- (4) 本節は以下から要約した。Kanji Akagi, "Leadership in Japan's Planning for War against Britain," in Brian Bond and Kyoichi Tachikawa, eds. *British and Japanese Military Leadership in the Far Eastern War, 1941-1945* (London: Frank Cass, 2004), 53-61.
- (5) 参謀本部編『杉山メモ』上（原書房、一九六七年）三五—四〇ページ、および防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 大本營陸軍部〈2〉』（朝雲新聞社、一九六八年）四三—四七ページ。
- (6) 秦郁彦「戦争終末構想の再検討—日米の視点から」『軍事史学』第三二卷第一・二合併号、一九九五年九月）二—二二ページ。
- (7) 佐藤元英、黒沢文貴編『GHQ歴史課陳述録—終戦史資料』下（原書房、二〇〇二年）八六—一〇〇ページ。元大本營陸軍参謀原四郎の証言。
- (8) 『戦史叢書 大本營陸軍部〈2〉』五六四、五七二—五七三ページ、および『GHQ歴史課陳述録—終戦史資料』下、七九四—七九五ページ（元参謀本部第二課長服部卓四郎、元軍令部第一課長富岡定俊の証言）。
- (9) 『杉山メモ』上、五二三—五二四ページ。
- (10) 『杉山メモ』上、五二三—五二四ページ。
- (11) 波多野澄雄「対英戦争と『独立工作』—シンガポールからインパールへ」二三—二四ページ、および大木毅「独ソ和平をめぐる群像—一九四二年の経緯を中心に」（近代日本研究会『年報 近代日本研究』一七、一九九五年）二四九—二八二ページ。
- (12) 『大本營陸軍部〈2〉』六〇—六〇七ページ。
- (13) 防衛研究所戦史室『戦史叢書 大本營海軍部・聯合艦隊〈2〉』（朝雲新聞社、一九七五年）七九—八一、七〇—

- 七一ページ。Ikuhiko Hata, "Admiral Yamamoto's Surprise Attack and the Japanese Navy's War Strategy," in Saki Dockrill, ed. *From Pearl Harbor to Hiroshima: The Second World War in Asia and the Pacific, 1941-45* (London: Macmillan, 1994), 62-64.
- (14) 『杉山メモ』上、五二四ページ。
- (15) 防衛研究所戦史室『戦史叢書 大本營陸軍部〈3〉』(朝雲新聞社、一九七〇年) 五一七ページ。
- (16) 西浦進『昭和戦争史の証言』(原書房、一九八〇年) 一六七ページ。
- (17) 野村實『太平洋戦争の日本の戦争指導』(近代日本研究会『年報 近代日本研究』四、一九八二年) 三七—三八ページ、および野村實『日本海軍の歴史』(吉川弘文館、二〇〇二年) 一九五—一九六ページ。
- (18) 『大本營海軍部・聯合艦隊〈2〉』三三三—三三五ページ。
- (19) 同右、三〇七—三二四ページ。
- (20) 同右、三三四ページ、および宇垣纏『戦藻録』(原書房、一九六八年) 五八—九一ページ (一九四一年二月三日、一九四二年一月五日、一四日、二七日、二八日、二月二日、三月三日の各条)。
- (21) 『大本營海軍部・聯合艦隊〈2〉』三六七—三六八ページ。
- (22) 『戦史叢書 大本營陸軍部〈3〉』五一八—一九九ページ。
- (23) 「田中新一参謀本部第一部長業務日誌」昭和一六年二月二三日の条(『大本營陸軍部〈3〉』三三三ページ)。
- (24) 秦郁彦『戦争終末構想の再検討』二八ページ。「西アジア」進攻にかかわる陸海軍省部の議論をめぐっては以下を参照。波多野澄雄『太平洋戦争とアジア外交』(東京大学出版会、一九九六年)、二九—五六ページ。
- (25) 防衛研究所戦史室『戦史叢書 蘭印・ベンガル湾方面海軍進攻作戦』(朝雲新聞社、一九六九年) 第九章。同『戦史叢書 南西方面海軍作戦』(朝雲新聞社、一九七六年) 六四—一六七八ページ。Hans-Joachim Krug, Yoichi Hirama, Berthold J. Sander-Nagashima, and Axel Niesté, *Reluctant Allies: German-Japanese Naval Relations in World War II* (Annapolis, Md.: Naval Institute Press, 2001), 43-57.
- (26) 野村『日本海軍の歴史』一九六—一九七ページ。
- (27) 防衛研究所戦史室『戦史叢書 大本營陸軍部〈4〉』(朝雲新聞社、一九七二年) 二八一ページ。

- (28) 防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本營海軍部・聯合艦隊〈3〉』（朝雲新聞社、一九七四年）一三二―一六〇ページ。
- (29) 同右、五五―六〇ページ。
- (30) 同右、一四一―一四二ページ、および宇垣『戦藻録』一六〇ページ（一九四二年八月七日の条）。
- (31) G. A. Ballard, *Rulers of the Indian Ocean* (Boston: Houghton Mifflin, 1928), 311.
- (32) Andrew Stewart, *A Very British Experience: Coalition, Defence and Strategy in the Second World War* (Bristol: Sussex Academic Press, 2012), 47-64.
- (33) Ian Kershaw, *Fateful Choices: Ten Decisions That Changed the World, 1940-1941* (London: Penguin Books, 2007), 382-430. [インマン・カニンガム『運命の選択』下（白水社、二〇一四年）一〇一―一八〇ページ]。
- (34) Arthur J. Marder, *Old Friends, New Enemies: The Royal Navy and the Imperial Japanese Navy, Strategic Illusion, 1936-1941* (Oxford: Clarendon Press, 1981), 28-48; See, Paul Haggie, *Britannia at Bay: The Defence of the British Empire against Japan, 1931-1941* (Oxford: Clarendon Press, 1981); Andrew Field, *Royal Navy Strategy in the Far East, 1919-1939: Preparing for War against Japan* (London: Frank Cass, 2004).
- (35) Jeremy Black, "Midway and the Indian Ocean," *Naval War College Review* 62, no. 4 (Autumn 2009): 134.
- (36) Ong Chit Chung, *Operation Matador: Britain's War Plans against the Japanese, 1918-1941* (Singapore: Times Academic, 1997).
- (37) Quoted in Black, "Midway and the Indian Ocean," 134.
- (38) Marder, *Old Friends, New Enemies*, 365ff; Christopher M. Bell, "'The Singapore Strategy' and the Deterrence of Japan: Winston Churchill, the Admiralty and the Dispatch of Force Z," *English Historical Review* 116 (2001): 604-634.
- (39) S. W. Roskill, *The Period of Balance*, vol. 2 of *The War at Sea* (London: HMSO, 1956), 23.
- (40) *Ibid.* 東方艦隊の戦艦は *Warship* が一九一三年一月六日就役の *Queen Elizabeth* 級戦艦で他は *Royal Sovereign* 級四隻 (*Royal Sovereign, Ramilies, Renenge*) であり、いずれも一九一五年から一九一六年にかけて就役した旧式艦であった。

- (41) 『戦史叢書 蘭印・ベンガル湾方面海軍進攻作戦』第九章参照。
- (42) Roskill, *The Period of Balance*, 28-30.
- (43) Churchill to Roosevelt, 15 April 1942, in Winston S. Churchill, *The Hinge of Fate*, vol. 4 of *The Second World War* (London: Cassel, 1951), 159-160; Warren F. Kimball, *Churchill & Roosevelt: The Complete Correspondence* (Princeton University Press, 1984), C-65, 1: 442-443.
- (44) Churchill to Roosevelt, 15 April 1942, in Churchill, *The Hinge of Fate*, 161-162; Kimball, *Churchill & Roosevelt*, C-69, 1: 442-443.
- (45) Diary entry, April 6, 7, 10, 1942. Alex Danchev and Daniel Todman, eds., *War Diaries, 1939-1945: Field Marshal Lord Alambroke* (London: Widentfeld & Nicholson, 2001), 245-247.
- (46) Paul Kennedy, *Strategy and Diplomacy: 1870-1945* (London: George Allen & Unwin, 1983), 186.
- (47) Black, "Midway and the Indian Ocean," 136; Tim Benbow, "Menace to 'Ironclad': The British Operations against Dakar (1940) and Madagascar (1942)," *Journal of Military History* 75, no. 3 (July 2011): 768-809.